放送大学研究年報　第38号（2020）117-125頁
Journal of The Open University of Japan, No. 38（2020）pp. 117-125

15世紀ブルッヘのエリート市民の アイデンティティ形成とブルゴーニュ公権力

―ピーテル・ブラーデリンの事例を中心に―

河　原　　温[1)]

The Formation of the Noble Identity in Burgundian Netherlands：A Case of Pieter Bladelin, Citizen of Bruges in the 15th Century

Atsushi KAWAHARA

要　旨

15世紀ブルゴーニュ公国の支配下のネーデルラントでは、都市エリートが貴族身分への上昇を目指し、商業活動による富の蓄積とともに、ブルゴーニュ宮廷の役職に登用されていく中で、社会的上昇を遂げていった事例が知られている。本論文では、そうしたエリート市民の社会的上昇プロセスの一例をピーテル・ブラーデリン（ca. 1410～1472）のケース・スタディを通じて考察する。ブラーデリンは、都市ブルッヘにおいて出納役を務めたのち、ブルゴーニュ公フィリップ・ル・ボンの宮廷において、ブルゴーニュ公の財政責任者として活動し、フィリップにより貴族へと叙任された。ブラーデリンは、その後、貴族的生活様式のため、ブルッヘ近郊の所領ミッデルブルフに城を中心とする小都市を建設している。15世紀フランドルの都市エリートがいかに貴族身分に憧れ、自身を貴族としてのアイデンティティに帰属させていったのかをみていく中で、ブルゴーニュ公の宮廷社会とブルッヘ都市社会を架橋した市民/貴族の様相を明らかにする。

ABSTRACT

In the 15th century Netherlands under the rule of the Burgundian Dukes, urban elites tried to go up to the noble status by holdig high offices in the court and city council. Pieter Bladelin, a citizen of Bruges is one of the most brilliant cases of such person who could manage to promote himself in higher status in the Burgundian court and government.

In this paper, we tried to follow his career in the city of Bruges and in the court of Burgundy. He constructed a castle and a small town of Middelburg in Flanders. By this way he could show and legitimize himself as a nobleman (*chcvalier*). His career and identity as the noble in Flanders shows an aspect of the important interaction between urban elites and the noble in the 15th century Flanders.

はじめに

15世紀の南ネーデルラントでは、歴代ブルゴーニュ公による領域的国家形成のプロセスの進行とともに、ブルゴーニュ公の宮廷に出仕した非貴族出自の市民エリートの社会的上昇がみられた。第三代のブルゴーニュ公フィリップ・ル・ボン（在位1419-1467）が彼の宮廷をおいたフランドル都市ブルッヘやヘント、ブラバント都市ブリュッセルなどにおいては、公国の主要な統治・行政組織に任用され、公の役人（officier ducal）として社会的上昇をめざし、新たな身分的、社会的アイデンテンティを確立しようとした一群の都市エリートが見いだされる[1]。本稿では、フィリップ・ル・ボン統治下で各種の宮廷役人を務めることにより社会的上昇を果たし、富と政治力を蓄えて「貴族」

[1)] 放送大学教授（「人間と文化」コース）

[1] W.Prevenier, Officials in Town and Countryside in the Low Countries：Social and Professional Developments from the Fourteenth to the Sixteenth Century, *Acta Historiae Neerlandicae*, vol. VII, 1972；B. Scnnerb, *L'Etat bourguignon（1363-1477）*, Paris, 1999, pp. 228-261.

（*noblesse*）としての威信を様々な「象徴資本」とともに獲得し、政治社会的エリートとして自己実現を果たしたブルッヘのエリート市民を取り上げ、ブルゴーニュ公権力に組み込まれつつ、中世末期の都市と公国の狭間で、いかなる新たな社会的アイデンティティを形成したのかを考察したいと思う。

近年、南ネーデルラントにおけるブルゴーニュ公、貴族、都市民をめぐる政治・社会関係については、ベルギー、オランダの研究者による研究が著しく進展している[2]。とりわけ、ブルゴーニュ公国における経済的繁栄の中心をなしたフランドル伯領の有力市民（*poorter*）がブルゴーニュ公の宮廷と国家の組織において収入役（*receveur*）や顧問（*conseiller*）をはじめとする様々な役職者として活動しつつ、貴族との婚姻関係を軸に社会的ネットワークを拡大し、社会的上昇を遂げていった事例が知られている。中世後期のフランドル地方において、エリート集団の中での社会的流動性は増大しており、ブルゴーニュ公フィリップ・ル・ボンとその息子のシャルル・ル・テメレール（在位1467-1477）による集権的政策は、フランドル都市の政治的エリート市民を国家の組織に登用することにより、「近代的」な国家（État modern）を作り出そうとする試みであったと考えられてきた[3]。近年のベルギー学界では、ヘント、リール、メヘレンなどにおかれた国務院（Rat van Vlaanderen/Conseil de Flandre）や会計院（Rekenkamer/Chamber des comptes）、高等法院（Parlement）などのブルゴーニュ国家の枢要な統治機関やブルッヘをはじめとする主要都市におかれた宮廷の役職者を務めた有力市民層やレジストなどの法・行財政の実務者集団について、プロソポグラフィー研究がすすめられている[4]。彼らは、君主から俸給をはじめとするさまざまな「資本」を与えられ、彼ら独自の社会的、文化的戦略と投資により、社会学者のP.ブルデュ―が区分しているところの「経済資本」、「文化資本」、「社会資本」、「象徴資本」をそれぞれ獲得していった[5]。とりわけ、貴族の称号は、象徴資本の重要な対象であった。ブルゴーニュ公領において、公に仕えた非貴族出自の高位の役人たちは、政治的影響力の強化と社会的ネットワーク形成の過程で自身の家系の子孫のために中世盛期以来、農村所領を保有してきた旧来の中小封建貴族層とのインタラクションを通じて新たなステータス（貴族的生活様式：vivre noblement）を求めたのである[6]。近年、14、15世紀のフランドル都市からブルゴーニュ国家の組織（国務院Conseil d'Etatおよび会計院Chambre des comptes）に参与したフランドル伯領出自の127名の役職者の検討を行ったJ.デュモリンは、ブルッヘ、ヘントをはじめとするフランドルの市民家系の多くが、より高次の社会ランクを希求し、旧来の貴族層との通婚をはじめとして、都市における大邸宅や農村所領、城（城塞）の所有、タペストリーや絵画などの奢侈品のコレクション、宗教的施設（小教区教会、礼拝堂、施療院等）への寄進など様々なカテゴリーの象徴資本を用いようとしていったと論じている[7]。

そうした近年の知見を踏まえながら、以下では、ブルゴーニュ公フィリップ・ル・ボンとその息子のシャルル・ル・テメレールの下で、貴族としての象徴資本を具現化していったブルッヘのエリート市民の代表的事例として、ピーテル・ブラーデリン（Pieter Bladelin：ca. 1410-1472）を取り上げたい。ブラーデリンの事例は、フランス語圏フランドル地方のラノワの領主で、フィリップ・ル・ボンの宮廷役職者を務めたジ

---

[2] J.Dumolyn, *Staasvorming en vorstelijke ambtenaren in het graafschap Vlaanderen（1419-1477）*, Antwerpen, 2003；J.Haemers, *For the Common Good. State Power and Urban Revolts in the Reign of Mary of Burgundy（1477-1492）*, Turnhout, 2008；F.Buylaerd, Eeuwen van Ambitie. De adel in laatmiddeleeuws Vlaanderen, Brussel, 2010；R. Stein, *De hertog en zijn Staten. De eenwordig van de Bourgondische Nederlanden, ca.1380-1480*, Hilversum, 2014等を挙げておく。

[3] J.Dumolyn, Nobles, Patricians and Officers：The Making of a Regional Political Elite in Late Medieval Flanders, *Journal of Social History*, vol. 40, 2006, p. 431.

[4] 基本的研究としてJ.Bartier, *Légistes et gens de finances au XVe siècle：les conseillers des ducs de Bourgogne Philippe le Bon et Charles le Téméraire*, Bruxelles, 1952-55；P.Cockshaw, *Le personnel de la chancellerie de Bourgogne-Flandre sous les ducs de Bourgogne de la maison de Valois, 1384-1477*, Kortrijk-Heule, 1982；J.Dumolyn, *Staatsvorming en vorstelijke ambtenaren*, 2003. ブルゴーニュ国家の役職者一般については、E.Lameere, *Le Grand Conseil des ducs de Bourgogne de la maison de Valois*, Bruxelles, 1900；Schnerb, *L'État bouguigon*, pp. 237-247を参照。

[5] ここでは、デュモリンらに従って、ブルデュ―の「資本capital」概念を援用する。「経済資本」とは、賃貸料や俸給等を含む金銭一般、「文化資本」とは、教育的称号（学位）や文化的嗜好、所有する芸術品などの文化財、「社会資本」とは、ギルドをはじめとする所属諸組織における役職に代表される社会的諸関係とそのネットワーク、そして「象徴資本」とは、社会的認知,政治的影響力等を含んだ概念である。Cf., W.De Clercq, J.Dumolyn and J.Haemers, "Vivre Noblement"：Material Culture and Elite Identity in Late Medieval Flanders, *Journal of Interdisciplinary History*, vol. 38-1, 2007, p. 4.

[6] 中世盛期のフランドルの貴族については、E.Warlop, *The Flemish Nobility before 1300*, Kortrijk, 1976を参照。中世後期のフランドル貴族の動向については、近年多くの研究が出されている。代表的なものとして、J.Dumolyn&F.van Tricht, Adel en nobiliteringsprocessen in het laatmiddeleeuwse Vlaanderen：een status quaestionis, *Bijdragen en Mededelingen betreffende de Geschiedenis van de Nederlanden*, vol. 115, 2000, pp. 197-222；J.Dumolyn, Nobles, Patricians and Officers, 2006, pp. 431-452；F.Buylard, Edelen in de Vlaamse stedelijke samenleving. Een kwantitatieve benadering van de elite van het laatmiddeleeuwse en vroemoderne Brugge, *Tijdschrift voor Sociale en Economische Geschiedenis*, t. 4, 2007. pp. 29-56；Id., *Eeuwen van ambitie. De adel in laatmiddeleeuws Vlaanderen*, Brussel, 2010等を参照。

[7] J.Dumolyn, *Staatsvorming*, 2003；Id., Pouvoir d'État et enrichissement personnel：investissements et stratégies d'accumulation mis en oeuvre par les officiers des ducs de Bourgogne en Flandre, *Le Moyen Age*, t. 114-1. 2008, pp. 67-94.

ャン・ド・ラノワ（Jean de Lannoy, 1410～1493）と興味深い同時平行関係をなしている。両者は、いずれもフィリップ・ル・ボンから多くの特権（封）を得て、15世紀の半ばにそれぞれ自身の獲得した所領に新たな都市（bourg fortifié）を建設した野心的人物であった[8]。ブラーデリンが建設した新都市は、「フランドルのミッデルブルフ」Middelburg in Vlaanderen（ゼーラントの都市ミッデルブルフMiddelburgと区別するため）と称され、ブルッヘの北東約15キロ、ダム（Damme）とアールデンブルフ（Aardenburg）の中間に位置する所領（hof）である[9]。

この新都市建設を通じて、ブラーデリンは何をめざしたのであろうか。以下では、彼の新都市建設をめぐる活動から、ブルゴーニュ公国下フランドルのエリート市民の社会的アイデンティティのありかを探ってみたい。

1　ピーテル・ブラーデリン――経歴と活動

ピーテル・ブラーデリンは1410年頃ブルッヘの生まれであるが、彼と同名の父親ピーテル・ブラーデリンは西フランドルのヴルヌ（Veurns）の富裕家系の出身であり、ブルッヘに移って、都市貴族として財をなした人物であった[10]。ブラーデリンは、ブルッヘにおいて当初商人として活動し、1435年には、同じくブルッヘの富裕家系の出自であるマルグリート・ヴァン・ド・ヴァーヘヴィーレ（Margriete van de Vageviere）と結婚している。彼は、商人からブルッヘの都市役人へと転じ、1430年代前半には、都市役人（*raadslid*）として市政に参画していた。1436年からブルッヘ市の収入役（*trésorier/thesaurier*）に任命されている。同年に生じたフィリップ・ル・ボンの課税に反対したブルッヘ中産市民の反乱（1436～1438）の際には、フィリップとブルッヘ市との間を仲介する使節（*delegatie*）としての役割を果たし、フィリップとブルッヘの間で政治的妥協がなされるよう努力した。反乱の終結後、ブラーデリンは、敗北した都市ブルッヘがフィリップに対して負った課徴金の徴収役を務めている[11]。1438年から1441年にかけては、フィリップの下でフランドル伯領の所領収入の管理者（*recette des "gros briefs" de Flandre*）を務め、その間1440年からは、フィリップの宮廷で顧問（*conseiller ducal*）、次いで1446年には宮廷におけるページェントの執行責任者（*maître d'hôtel/hofmeester*）の役職に任じられ、公フィリップの信頼の厚い側近の一人としてその後20年余りにわたり活動することになった。

ブラーデリンの経歴にとって大きな転換点となったのは、1442年から1444年の間、ブルゴーニュ国家収支を全般的に管理する重要なポストであるリールの会計院の「総収入役」（*algemeen ontvanger van al de financiën/gouverneur général des toutes des finances*）に就いたことであろう。フィリップの治世下でこの地位に就いた9名のうちフランドルの市民出身者がブラーデリンとポーペリンヘ出身のギベール・ド・ルプル（Guibert de Ruple）のわずか2名であったことは、ブラーデリンの存在の重要性を示唆している[12]。

1444年には、ブルゴーニュの国家財政の収入役（*tresorier et gouverneur général des finances*）に任ぜられ、1447年まで務めた。また、1446年からは、ブルッヘのブルゴーニュ公の邸宅（Prinsenhof）の改装の実務も担当している。1447年には、フィリップ・ル・ボンがブルゴーニュの枢要な貴族を集めて1430年に組織した金羊毛騎士団の収入役（*receveur de l'ordre de la toison d'Or*）も任された[13]。

政治的には、1450年代のヘントの反乱、および1464年から68年におけるブルッヘやヘントの争乱において、ブルゴーニュ公とヘントおよびブルッヘの間の仲介を担う使節（*diplomate*）を務めた。また、ブラーデリンは、ブルゴーニュ公の対イングランド政策の中で、1440年にイングランドに囚われていたオルレアン公の解放のために、フィリップ・ル・ボンの指令を受けてイングランドヘ渡っている。さらに1454年にリールの宮廷において行われた「雉の宴banquet de Faisan」以降、フィリップ・ル・ボンによる対オスマン遠征の構想のために、金羊毛騎士団を中心に数度にわたって企図されたフランドルとブラバントの貴族・諸都市への呼びかけの会合においてブラーデリンは、金羊毛騎士団の収入役としてのみならず、その主要メン

[8] 両者を対比的に検討した研究としてJ.M. Cauchies, Deux grands commis bâtisseurs de villes dans les Pays-Bas bourguignons：Jean de Lannoy et Pierre Bladelin（vers 1450/1460）, in：*De Jacques Coeur à Renault. Gestionnaires et organisations*, Toulouse, 1995, pp. 45-58が興味深い。

[9] この所領は、1280年以来ゼーラントのミッデルブルフのプレモントレ会修道院abbey zélandaise des Prémontrés de Middelbourg により領有されていた。Cf. C.Claeys, *Het hof Bladelin te Brugge*. Brugge, 1988, pp. 15-16；Dumolyn, Pouvoir d'État et enrichissement personnel, pp. 91-92.

[10] ブラーデリンの経歴については、以下の文献を参照。J.J.De Smet, "Le chevalier Bladelin, surnommé Leesmakere, et la ville de Middelbourg en Flandre", *Bulletin de l'Academie Royale de Belgique*, XXII, 1866, pp. 434-436；G.Milis-Proost, "Bladelin, Pierre", *Nationaal Biografisch Woordenboek*, II, 1967, pp. 61-63. M. Martens, Nieuwe biografische gegevens over Pieter Bladelin, de stichter van Middelburg, *Jaarboek van de heemkundige kring Het Ambacht Maldegem*, V, 1999, pp. 244-250；W.De Clercq, J.Dumolyn, J.Haemers, "Vivre Noblement"：Material Culture and Elite Identity in Late Medieval Flanders, *Journal of Interdisciplinary History*, vol. 38-1. 2007, pp. 4-6.

[11] J.Dumolyn, *De Brugse opstand van 1436-1438*, Kortrijk-Heule, 1997, p. 348.

[12] Bartier, *Légistes et gens de finances au XVe siècle*. p.48；Stein, *De Herzog en zijn Staten*, pp. 131-132.

[13] G.Milis-Proost, "BLADELIN, Pieter", *Nationaal Biografisch Woordenboek*, vol. 2, Brussel, 1966, pp. 61-62；M.Martens, Nieuwe biograhische gegevens over Pieter Bladelin, de stichiter van Middelburg, pp. 244-250；Scnerb, *L'État bourguigon*, p. 303.

バーとして積極的に参画しており、この活動がフィリップからの信任を得る一つの重要な契機になったように思われる[14]。

ブルゴーニュ公と都市ブルッヘとの間の仲介者的役割（*intermédiaire*）を果たし続けたブラーデリンは、1464年から1472年の間、ブルッヘの市政のトップを構成する新たな参審人（*schepen*）と市長（*burgemeester*）を任命するために委託されたブルゴーニュ公側の役職者（*officier ducal*）の１人として活動している。

ブラーデリンは、1468年にシャルル・ル・テメレールのもとで騎士身分に叙任され、1472年４月に彼の建設した新都市ミッデルブルフで没した。死の直前の1472年３月17日付の彼の遺言書が遺されている[15]。

以上のような経歴のうちに、ブラーデリンが1440年代から50年代にかけて、ブルゴーニュ公フィリップの宮廷において、フィリップとの信頼関係ののもとで公の役人として社会的地位を上げ、ブルゴーニュ公国の内外において枢要な役割を果たしたことが知られよう。ブラーデリンが、ブルッヘの北東約15キロに位置する彼の所領（ミッデルブルフ）に、新都市を建設したのは、まさしくこの時期であり、彼の社会的野心の一つの表明であったように思われる。

2　ブラーデリンの新都市建設事業

ブラーデリンは、すでに1430年代に、のちのミッデルブルフの新都市建設地となるフランドル伯領の北東部のマルデヘム地区（ambacht Maldegem）一帯の個別所領（Brieven van Aartrijke, Paddepoele in Maldegemなど）を封（fief）として獲得し、続く1440年には、彼の義弟コラール・ル・フェーヴル（Colard le Fevre）がゼーラントのミッデルブルフのプレモントレ会修道院から購入していた「ミッデルブルフの所領」（Hof van Middelburg in Vlaanderen）を買い取った。以後、10年間にわたり、ブラーデリンは、ミッデルブルフ周辺の所領を統合するために、周辺農村の小封地を集積していった[16]。1444年、ブルゴーニュ公フィリップは、ブラーデリンに対してそれらの封地を一つにまとめてHof van Middelburg in Vlaanderenとしてブラーデリンに与えている[17]。

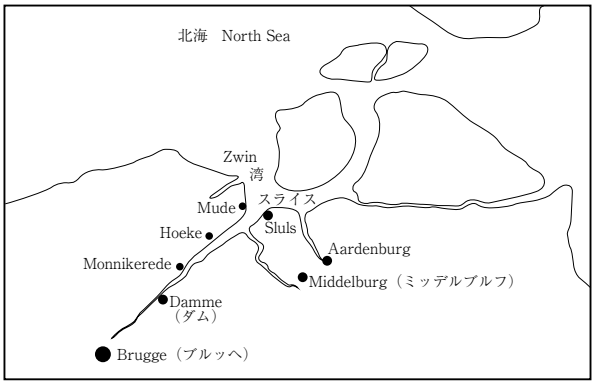

図１　ミッデルブルフ（Middelburg in Vlaanderen）の位置

1448年を契機に、ブラーデリンはミッデルブルフの所領（約200ヘクタール）に、新都市と城を建設し始める。新都市のデザインは、都市を３つの通りで６つの部分に分割し、それぞれに居住エリア、商業活動エリア、教会と施療院を中心とする宗教エリア等を割り当てている。近年の考古学的発掘と16世紀の地図に基づいて復元された都市域は、小規模であるが、都市内のレイアウトは、「水の都」と称されるブルッヘの歴史的都市空間が水路（運河）によって分割されているのに類似している。すなわち掘（水路）が都市全体を囲むとともに、都市の内部空間を明確に分割していること、また都市を北東から南西に貫く直進路を中心軸としてその南西側の縁に城が位置することで、全体として極めて計画的な配置となっていることが注目される。デュモリンによれば、この都市の逸名のプランナ

[14] J.Paviot, *Les ducs de Bourgogne, La croisade et l'Orient*, Paris, 2003, p. 140；Schnerb, *L'État bourguignon*, pp. 314-315；Bartier, *op.cit.*, p. 354.

[15] C.Verschelde, Testament de Pierre Bladelin. Fondateur de Middelbourg en Flandre,, 17 Mars 1472, *Annales de la Société pour l'étude de l'histoire et de antiquetés de la Flandre*, t.XXX, 1879, pp. 1-32. この遺言書の前半部（31項目）は、新都市ミッテルブルフの教会（Kerke van Middelburch）に向けられた彼の死後の魂の救済のための年ミサ（zielmesse van requiem）や記念壽（jaerghetijde）の設定、小教区在住の60名の貧者（zestich aerme huuszittende van der parochi van Middelburch）への喜捨など、宗教的、慈善的取り決めであり、後半部（29項目）は、子供のいなかったブラーデリンによる親族（妻、妹,義弟等）や使用人等への遺贈が中心となっている。フランドルの市民エリート（ブルゴーニュ国家の役職者）の救霊・来世への態度については、J.Dumolyn & K.Moermans, Dinstinctie en memorie. Symbolische investeringen in de eeuwigheid door laatmiddeleeuwse hoge ambtenaren in het graafschap Vlaanderen, *Tijdschrift voor Geschiedenis*, 116-3, 2003, pp. 335-342.

[16] ブラーデリンの所領形成とミッデルブルフ新都市建設事業について、近年、ヨナス・ブレーケヴェルトにより81点の関連史料集成が刊行された。J.Braekevelt, *Pieter Bladelin, de Rijselse Rekenkamer en de stichting van Middelburg-in-Vlaaderen（ca. 1444-1472）：de ambities van een opgeklommen hofambtenaar versus de bescherming van het vorstelijke domein*. Brussel, 2012. 以下この史料集をBraekevelt, *Bladelin text*と略記する。

[17] フィリップ・ル・ボンによる1444年8月23日付の譲渡文書（Rijksarchief te Gent, Kerkarchieven provincie Oost-Vlaanderen, Parochie Middelburg, nr. 3）in：Braekevelt, *Bladelin text*, nr. 12, pp. 28-32：≪Phelippe, duc de Bourgoingne, ...,comte de Flandre.... A tous ceulx qui ces presentes lettres verront,salut. Savoir faisons（...）nostre ame et feal conseiller et gouverneur general de toutes noz finances Pierre Bladelin, dit Leestmakere, contenant que comme il ait et lui appartiengne une maison appellee Middelbourg scitué en la paroisse de Heyle en nostre terroir du Franc et aussi ait acheté certaines autres maisons et terres contenant toutes cnsemble, tant en prèz et bois comme terres labourables trois cens huit mesures, deux lines et trente sept verges de terre.....scituees et gisans en nostredit terroir du Franc et ou mestier de Maldeghem...≫

ー（ブラーデリン自身であるかは不明）は、ローマ時代にすでに存在していたとみられるブルッヘとアールデンブルクを結んでいた古代の道を中軸として、この都市を計画したとみられるという。その軸上に位置する城は、この新都市の物理的、精神的要に位置し、その所有者の威信を表していた。そこには、堀や城壁、市門により周辺農村領域とは区別された新たな権力の場が現出したと言えよう。この新都市は堀割によって当初から囲まれていたが、市門と市壁は1466年になってブルゴーニュ公フィリップの認可により付け加えられた。また、ブラーデリンが建設した市庁舎もこの新都市のシンボル的建築となった。彼は、1458年３月に公フィリップからミッデルブルフを管轄する１名の市長と９名の参審人を任命する許可を得て、この新都市の統治組織を完成させたのである[18]。

さらに、都市の宗教施設としてブラーデリンは、1452年以降ペテロとパウロに捧げられた教会（Kerk van Sente Pieter en Sint Pauwels te Middelburg）を都市の中心部に建設した。また、同じ1452年に「ヨハネ施療院」（Sint Jans hospitaal）を創建するとともに、おそらく1460年には射手（聖セバスティアン）ギルド（ghilde van Sente Sebastiaen）を創設している。

1470年には、トゥールネ司教により、ミッデルブルフに小教区設立と墓地の認可が与えられ、聖堂参事会（６名の参事会員）と礼拝堂付司祭（２名）および小教区司祭（１名）が上記のミッデルブルフ教会に付け加えられた[19]。

ブラーデリンは、ミッデルブルフの都市制度の整備とともに、経済的機能をこの新都市に付加した。1465年に、彼は公フィリップから年間12日間の年市（annuellement une france foire、durant l'especе de douze jours）を開催する許可を得るとともに[20]、ミッデルブルフとリーヴェ河を連結する運河を掘削させた。リーヴェ河は、ヘント、ズウェイン湾（スライス）、ダム、ブルッヘをつなぐ重要な経済的ルートの一部をなしており、新都市ミッデルブルフを中世後期フランドルの大商業圏のネットワークに組み込むことになったのである。また、ブラーデリンは、1467年にブルゴーニュ公に反抗して、都市破壊の報復を受けたムーズ地方の都市ディナンから真鍮加工職人を、またブリュッセルからタペストリー職人をミッデルブルフに誘致している。これらの高品質な手工業製品に対する宮廷や貴族、都市からの需要は大きく、ミッデルブルフの都市経済の安定をもたらしたと考えられる。ディナンの職人家系集団は、ミッデルブルフに16世紀末まで定着、存続してこの小都市の経済に貢献したのである[21]。

他方、シャルル・テメレールが1468年にマーガレット・オヴ・ヨークと結婚したことで、シャルルの義兄弟となったイングランド王エドワード4世が、1470/71年にネーデルラントに一時亡命しており、帰国後の1472年以降ミッデルブルフに対して北部イングランドにおける毛織物ステープル特権や真鍮製品の広範な販売権など種々の商業的特権状を付与したことが知られている[22]。イングランドに外交使節として派遣された経験をもち、エドワードの南ネーデルラント滞在中、彼を厚遇したブルゴーニュ公シャルル・ル・テメレールの下でエージェントの役を務めていたブラーデリンの政治活動が、新都市ミッデルブルフの経済的ステータスを高めることになったのである。とはいえ、ブラーデリンにとって、新都市ミッデルブルフの建設はフランドルにおける交易の拠点形成といった単なる経済的動機に基づくものではなかった。先に言及したが、宮廷の高官としてフィリップ・ル・ボンに仕え、ラノワ（Lannoy）の所領に新都市を建設したジャン・ド・ラノワの場合と同様、新都市建設の企図は、地域社会における領主としての卓越性と貴族のステータスの視覚的表示であったと考えられる[23]。ミッデルブルフという新都市とそれに付属した城（城砦）を建設し、所有することは、ブラーデリンというエリート市民がブルゴーニュ国家と宮廷の中で、とりわけ多数を占めた南部ブルゴーニュ公領の貴族出自の上級役職者たちと競合しつつ、自身が新たな貴族としてランクアップした社会に身を置くために必要な装置であったと言えるだろう。大半の貴族がもっぱら耕地や牧草地をはじめとする農村所領へ投資していたのとは異なり、ブラーデリンにとって彼の社会的、政治的願望を促進し、「エリート市民」から「貴族」へという彼の新たな社会的アイデンティティを提示するために、逆説的ながら「都市」という社会空間が必要とされたと考えられるのである[24]。

3　新都市建設を通じたブラーデリンの社会的アイデンティティとブルゴーニュ公権力

ブラーデリンは、上述のジャン・ド・ラノワと同様、彼らの社会的威信を高めるための文化的、宗教的プロジェクトに関わるのに十分な富を所有していた。

[18] Braekevelt, *Bladelin text*, nr. 27（Brugge, 1458年3月17日付）, pp. 73-75.

[19] De Clercq, Dumolyn, Haemmers, op.cit., p. 14；Cauchies, op.cit., p. 52. 遺言書において、ブラーデリンは、死後このミッデルブルフの教会に埋葬されることを指定していた。Verschelde, Testament de Pierre Bladelin, p. 11：≪Begheerende mijn Sepulture, ende begraven te wetene in de Kerke van Sente Pieter en Sente Pauwels te Middelburch voerscreven,...≫

[20] Braekevelt, *Bladelin text*, nr. 75（Brussel, 1465年3月付）, pp. 238-240.

[21] De Clercq, Dumolyn, Haemers, op.cit., pp. 11-12；Cauchies, op. cit., p. 55；Martens, op. cit., p. 248.

[22] L.Visser-Fuchs, Edward IV's Grants of Privileges to People and Places in the Low Countries, 1472-1478, *PCEEB*（*XIVe-XVIe siècles*）, t. 44, 2004, p.157.

[23] Cauchies, op.cit., pp. 54-55.

[24] Bartier, *op.cit*., pp. 240-242；De Clercq, Dumolyn, Haemers, op.cit., pp. 12-13.

年代記者ジョルジュ・シャトランは、フィリップ・ル・ボンとシャルル・ル・テメレールの宮廷を叙述した『年代記』Chroniqueにおいて、ブラーデリンに言及し、彼が極めて富裕で、ブルゴーニュ公役人としての俸給の他に、年額6,000エキュ以上の定期金（rente annuelle）を得ていることなどを記述している[25]。

1456/1461年頃、ブラーデリンは、初期フランドル派の画家ロヒール・ファン・デル・ウェイデン（1399～1464）に3連の祭壇画（トリプティック）を発注した。イエス・キリストの生誕（nativité）を主題とするこの著名な祭壇画の中央パネルには、イエスの生誕の場面と並んで寄進者たるブラーデリンが敬虔な祈りの姿で描かれ、ミッデルブルフと想定される都市の街路、教会と城の写実的な風景が背景に表現されている。そして、右パネルには東方三博士に擬せられたブルゴーニュ公フィリップとシャルルの父子と当時ブリュッセルのブルゴーニュ宮廷に滞在していた後のフランス王ルイ11世が描かれているとされている。この通称＜ブラーデリン祭壇画＞（retable de Bladelin）は、ヴァロワ＝ブルゴーニュ家の君主の栄光と名誉を称えつつ、ブルゴーニュ公の家臣たるピーテル・ブラーデリンが、フランドルの領主（貴族）として敬虔かつ高貴なイメージで本パネルに描かれ、聖書的世界と15世紀のフランドルの世俗的世界（背景のミッデルブルフの都市景観）の同時的融合の中にシンボリックに位置づけられている作品となっていると言えるだろう[26]。

ところで、ブラーデリンの建設した新都市ミッデルブルフにおけるもう一つの重要な威信財が「城」である。城（chateau/bourg）は中世盛期以来、領主制の軍事的、視覚的シンボルとしての機能を果たしてきた。しかし、フランドル地方を含む北西ヨーロッパにおいて、城のもつ軍事的重要性は、1300年以降相対的に低下しており、むしろ貴族の居住する宮殿（palatial residence）としての性格を強めていったとみなされている[27]。

1448年から50年にかけてブラーデリンが建設したミッデルブルフの城は、1488年にマクシミリアン1世に対して反乱をおこしたフランドル諸都市により攻撃されて一部が破壊され、さらに1604年のスペイン軍によるネーデルラント攻撃の際、その大部分が破壊されてしまった。今日、城はその礎石のみが残されているだけであるが、ミッデルブルフの防備の再建のために1608年頃作成された建築プランが残されており、城の部分の発掘に基づく近年の考古学的所見は、その建築プランの正確さを証拠だてている。城の内部は、三層構造になっており、暖炉を中心とする技術的に革新的な暖房システムや水回りが見て取れるという[28]。

また、城の内部装飾についても、床にはブラーデリン家の紋章やモノグラム（PB）を彫り込んだ青地と白地及び金色の色彩の組み合わせからなるスペインのバレンシア産の高価なタイルが使用されていたことが確認されるが、この種のタイルは、14世紀後半に、初代ブルゴーニュ公フィリップ・ル・アルディのアラスの邸宅やフランスのベリー公の城の装飾のために用いられたスペイン産のタイルと共通しており、ブラーデリンの城の素材が、彼の貴族としての威信を高める「象徴資本」から成っていたことをうかがわせる[29]。この種の高価なタイルの使用は、15世紀の都市ブルッヘにおける最も有力な貴族の１人であったロードウェィク・ファン・フルートフーズ（ルイ・ド・ブリュージュ）の邸宅やブラーデリンと同世代のブルゴーニュ宮廷の書記官長（*chancellier*）であったニコラ・ロランが寄進したボーヌの著名な施療院（1443年建築）の屋根のタイルにも使用されており、ブルゴーニュ公と

---

[25] Chastellain, *Chronique*,（éd. Kervyn de Lettenhove）, t.V, Chap. XCIV：p.44：≪ce ronommé et grand homme en richesse et en sens, Pierre Bladelin, gouverneur sur toutes les finances des pays du duc,...；il estoit maistre d'hostel du duc, un des quatre trésoriers de l'ordre de la Toison d'or. riche des biens de fortune outre mesure：avoit, ce disoit-on, bien six mille escus d'or de rente par an. sans son argent prest；...Un bien y avoit, qui estoit grand, car il dressa le fait du duc merveilleusement en bien；≫. Cf., Bartier, *op.cit*., p. 227.

[26] De Clercq, Dumolyn, Haemers, "Vivire Noblement", p. 13.美術史からのこの祭壇画の解釈については、L.S.Dixon, Portraits and Politics in Two Triptycs by Rogier Van der Weyden, *Gazette des Beaux-Arts*, vol. 129, 1987, pp. 186-188；B.Dekeyzer, For Etenal Glory and Remembrance：On the Representation of Patrons in Late Medieval Panel Paintings in the Southern Low Countries, in：P.Trio & M.De Smet（eds）, *The Use and Abuse of Sacred Places in Late Medieval Towns*, Leuven, 2006, pp. 77-78.また、初期フランドル派の絵画の中の都市描写の写実性・実写性については、P.Stabel, Social Reality and Artistic Image：the Urban Experience in the Late Medieval Low Countries. Some Introductory Remarks on the Occasion of a Colloquium, in：M. Carlier, A.Greve, W.Prevenier, P.Stabel, eds., *Core and Periphery in Late Medieval Urban Society*, Leuven, 1997, pp. 16-25及び最新のモノグラフとして、J. De Rock, *The Image of the City in Early Nederlandish Painting*（*1400-1550*）, Turnhout, 2019；今井澄子「初期フランドル絵画の「実景」―都市ブリュッヘのアイデンティティの形成とその繁栄をめぐって―」『大阪大谷大学文化財研究』第13号、2013年、103頁では、この＜ブラーデリン祭壇画＞が「フランドル地方の実景とわかる都市や建築物を明示する例」として挙げられている。

[27] De Clercq, Dumolyn, Haemers, op.cit., p. 15.

[28] 発掘成果から知られるミッデルブルフの城の構造と特徴については、De Clercq, Dumolyn, Haemers, op.cit. pp. 15-20を参照。

[29] この種のタイプのタイルは、ヤン・ファン・エイクの著名な祭壇画《枢機卿ヨリス・ファン・デル・パーレと聖母子》（1436年）の床面においても描かれている。この種の高価なスペイン産タイルは、個人的な注文のみならず、15世紀ブルゴーニュ宮廷の貴族たちの間での贈答品交換の文脈においても重要な意味を有していたと考えられる。M.P.Martens, Till-Holger Borchert, et al.（eds.）, *Van Eyck*, London, 2020, pp. 322-323およびW.De Clercq, J.Braekevelt et al., Aragonese Tiles in a Flemish Castle. A Chivalric Gift-exchange Network in Fifteenth Century Europe, *Al-Masaq-Islam and the Medieval Mediterranean*, 27, n.2, 2015, pp. 153-171.

その宮廷の高官たちに限られた貴族の「象徴資本」であったことを示している。高価で希少なタイルを彼の城の床面に意図的に用いることにより、ブラーデリンは、一定の社会的ステータスを表現したばかりではなく、フランス王家につらなるブルゴーニュ公家の高貴さに由来する貴族文化の伝統の中に彼自身を参画させようとしたといえるだろう。ブラーデリンにとって、ミッデルブルフの新都市建設と城の構築は、ブルゴーニュ宮廷における彼の社会的威信と貴族的様式（vivre noblement）としての新たな社会的アイデンティティを人々に具現化する可視的装置となったのである[30]。

他方、ブラーデリンは、ミッデルブルフの所領における都市建設に先立つ1435年から40年にかけて、ブルッヘ市内のブルゴーニュ公の邸宅（宮廷）近くに、彼の自邸を建設した。この邸宅は、尖塔とフランドル風の破風を備えた後期ゴシック様式で建てられており、その後1466年にはフィレンツェのメディチ銀行のブルッヘ支店として借り上げられた。ブルゴーニュ公の宮廷に出入りしてシャルル・ル・テメレールに莫大な軍事資金を提供したメディチ銀行のブルッヘ支配人トンマーゾ・ポルティナーリが、後に居住することになる。ブラーデリンは、ブルッヘのフィリップの宮廷Prinsenhofでポルティナーリと懇意であったとみられ、ポルティナーリによるブラーデリン邸の継承は、ブルッヘの宮廷における両者の密接な関係をうかがわせるものと言えよう[31]。

1472年４月にブラーデリンが嫡出子なしにミッデルブルフで没した後、彼の最大の遺産となったミッデルブルフの所領（hof van Bladelin）は、親族たちの間での係争を経た後、1476年にシャルル・ル・テメレールの書記官長（*chancellier*）ギョーム・ユゴネ（Guillaume Hugonet, 1420－1477）によって継承された[32]。ユゴネもまた、南部ブルゴーニュ公領（マコン）の非貴族家系の出自で法学を学び、自身の才覚でフィリップ・ル・ボンの宮廷で頭角を現し、フィリップの息子のシャルル・ル・テメレールの信任を得て、彼の下で６年間にわたり書記官長を務めた[33]。ユゴネは、シャルルの政治的イデオローグとして主要な役割を果たす一方、個人的には書物やタペストリーを収集する宮廷の学識者・文化的パトロンの１人であった。彼は、南部ブルゴーニュ公領のみならず、北部のフランドル伯領やブラバント公領の都市（ブルッヘ、ブリュッセル、メヘレン）で邸宅を購入する一方、農村部においても広大な所領や城をシャルルから封として獲得し、貴族（領主）としての威信を高めていった[34]。ミッデルブルフの所領の取得もまた彼の貴族としての「象徴資本」をなしたのである。しかし、ユゴネは、1477年１月のナンシーにおけるシャルルの戦死の結果、シャルルの集権的政策に抵抗したフランドル諸都市の市民軍により捕らえられ、1477年４月にヘントの金曜広場において、同じくシャルルの側近であったギィ・ド・ブリム（Guy de Brimeu）ともども処刑されてしまうことになる[35]。彼が短期間ながら所有したミ

図２　ブルッヘのブラーデリン邸（1460 年代改築）（写真出典：河原・堀越『図説中世ヨーロッパの暮らし』河出書房新社、2015 年）

[30] De Clercq, Dumolyn, Haemers, op.cit., pp. 22-29.

[31] M.Boone, Apologie d'un banquier médiéval：Thommaso Portinari et l'État bourguignon, *Le Moyen Age,* t.CV, 1999, pp. 31-54；河原温「15世紀ブルッヘのイタリア商人に関するノート――トマーゾ・ポルティナーリ（ca. 1428－1501）の活動をめぐって――」『人文学報』（東京都立大学）、346号、2004年、80-81頁。

[32] Bartier, *op.cit*. pp. 229, 236-237.

[33] ユゴネの経歴とシャルルの宮廷におけるその役割については、W.Paravicini, Zur Biographie von Guillaume Hugonet, Kanzler Herzog Karls des Kühnen, in：*Menschen am Hof der Herzöge von Burgund*, Stuttgart, 2002, pp. 107-142；Id., L'arsenal intellectuel d'un homme de pouvoir. Les livres de Guillaume Hugonet, Chancelier de Bourgogne, in：*Menschen am Hof*, pp. 143-208；シャルルの集権政策のイデオローグとしてのユゴネについては、河原温「15世紀後半ブルゴーニュ公国における都市・宮廷。政治文化――シャルル・ル・テメレール期を中心に――」藤井美男編『ブルゴーニュ国家の形成と変容――権力・制度・文化――』九州大学出版会、2016年、279-281頁を参照。

[34] De Clercq, Dumolyn, Haemers, op.cit., pp. 7, 13.　ユゴネもまた、ブラーデリンと同様、著名な画家フーホー・ファン・デル・フースに彼の肖像を発注している。W.Paravicini, L'arsenal intellectuel d'un homme de pouvoir. in：*Menschen am Hof der Herzöge von Burgund*, pp. 143-199.

ッデルブルフの城は、以後2度にわたってブルッヘの市民軍により占領されたが、1492年にギョーム・ユゴネの息子であるギョーム・ユゴネ２世がハプスブルク家の庇護下で、ミッデルブルフの所領を取り戻し、以後１世紀にわたってユゴネ家がミッデルブルフの所領を封として保持することとなった[36]。ミッデルブルフの城は、ブラーデリンとユゴネの双方にとって彼らの身分と家系の威信、そしてブルゴーニュ家、ハプスブルク家といった支配君主家系との密接な絆を眩示する「象徴資本」をなしたのである。

おわりに

以上、15世紀半ばのフランドル地方において、ピーテル・ブラーデリンというブルッヘ市民をモデル・ケースとして、エリート市民がブルゴーニュ公の庇護のもとで、いかに貴族身分を獲得し、貴族としての社会的アイデンティティを形成していったかをみてきた。彼の事例は、彼の所領の後継者となったギョーム・ユゴネのケースとさらなる比較の対象となりうるだろう[37]。また同じく、ブルッヘの市民出自でブルゴーニュ公の収入役としてブラーデリンと同様に社会的上昇を遂げながら、君主側のエージェントとしてブルッヘ市民と敵対したことで、ブルッヘにおいて処刑されることになったピーテル・ランシャル（Pieter Lanchal、1410？－1488）の生涯とも共通点を有している[38]。彼らは、いずれも中世末期のフランドルにおける貴族アイデンティティを体現し、都市民から貴族への社会的上昇に伴う自己アイデンティティの確立のために、物質文化の表象としての都市や邸宅、城、施療院といったさまざまな資本を利用してそれらに単なる眩示的消費以上の意味を付与したのであった。

そうしたエリート市民は、ブルゴーニュ公フィリップやシャルルによりブルゴーニュ国家機構の有用な実務者として重用され、貴族としての社会的アイデンティティを獲得しながら、都市/農村、貴族/市民という伝統的にこれまで二分されて考えられがちであった社会範疇を突き抜けてブルゴーニュ公による国家形成のプロセスの中で、新たなパワー・エリートとして自己形成を果たしたと言えるだろう[39]。

文献

Bartier, J.［1952-55］*Légistes et gens de finances au XVe siècle：les conseillers des ducs de Bourgogne Philippe le Bon et Charles le Téméraire*, Bruxelles.

Boone, M.［1999］Apologie d'un banquier médiéval：Thommaso Portinari et l'État Bourguignon, *Le Moyen Age*, t.CV, 31-54.

Id.［2003］La justice en spectalcle：La justice urbaine en Flandre et la crise du pouvoir'bourguignon'（1477-1488）, *Revue Historique*, t. CXXV, 43-65.

Id.［2009］Un grand commis de l'Etat burgundo-Hapsbourgeois face à la mort：le testament et la sepulture de Pierre Lanchals（Bruges, 1488）, in：F.Daelemans＆A.Kelders（éd.）, *Miscellanea in Memoriam Pierre Cockshaw（1938-2008）*, Bruxelles, 63-88.

Braekevelt, J.［2012］*Pieter Bladelin, de Rijselse Rekenkamer en de stichting van Middelburg-in-Vlaanderen（ca.1444-1472）：de ambities van een opgeklommen hofambtenaar versus de bescherming van het vorstelijke domein*, Brussel.

Brown, A.＆J. Dumolyn（eds.）［2018］*Medieval Bruges, 850-1550*, Cambridge.

Buylaert, F.［2007］Edelen in de Vlaamse stedelijke samenleving. Een kwantitatieve benadering van de elite van het laatmiddeleeuwse en vroegmoderne Brugge, *Tijdschrift voor Sociale en Economische Geschiedenis*. Vol. 4, 29-56.

Buylaert. F.［2010］*Eeuwen van Ambitie. De adel in laatmiddeleeuws Vlaanderen*, Brussel.

Buylaert, F., W.De Clercq, J.Dumolyn［2011］Sumptuary Legislation, Material Culture and the Semiotics of "vivre noblemen" in the County of Flanders（14th-16th Centuries）, *Social History*, vol. 36-4, 393-417.

Cauchies, J-M.［1995］Deux grands commis batisseurs de villes dans les Pays-Bas bourguignons：Jean de Lannoy et Pierre Bladelin（vers 1450/1460）, in：*De Jacques Cœur à Renault. Gestionnaires et organisations*, Toulouse, 45-58.

Claeys, C.［1988］*Het hof Bladelin te Brugge*, Brugge.

Chastellain, G.［1868］*Chronique,*（éd. Kervyn de Lettenhove）, Bruxelles, 8vols.

Cockshaw, P.［1982］*Le personnel de la chancellerie de Bourgogne-Flandre sous les ducs de Bourgogne de la maison de Valois, 1384-1477*, Kortrijk-Heule.

De Clercq, W., J.Dumolyn, J.Haemers［2007］"Vivre Noblement"：Material Culture and Elite Identity in Late Medieval Flanders, *Journal of Interdisciplinary His-*

[35] 河原「15世紀後半ブルゴーニュ公国における都市・宮廷・政治文化」、281頁。ユゴネの遺言書（1476年12月5日付）は、パラヴィッチーニにより刊行されており、ブラーデリンの遺言書との比較も興味深い。Paravicini, Zur Biographie von Guillaume Hugonet, pp. 131-142.

[36] J.Haemers, Middelburg na Pieter Bladelin：De juridische en militarische srijd tussen vorst, stad en adel om sociale erkenning en politieke macht（1472-1492）, *Handelingen van het Genootschap voor Geschiedenis*, CXLII, 2005, pp. 215-265.

[37] De Clercq, Dumolyn, Haemers, op.cit., pp. 13-15.

[38] ピーテル・ランシャルについては、M.Boone, La justice en spectacle：La justice urbaine en Flandre et la crise du pouvoir 'bougguignon'，（1477-1488）, *Revue Historique*, t.CXXV, 2003, pp. 43-65；Id., Un grand commis de l'État burgundo-habsbourgeois face à la mort：le testament et la sepulture de Pierre Lanchals（Bruges, 1488）, in：F.Daelemans＆A.Kelders（éd.）, *Miscellanea in Memoriam Pierre Cockshaw（1938-2008）*, Bruxelles, 2009, pp. 63-88を参照。

[39] Dumolyn, Nobles, Patricians and Officers, pp. 445-446；F.Buylaert, W.De Clercq, J.Dumolyn, Sumptuary Legislation, Material Culture and the Semiotics of *'vivvre noblement'* in the County of Flanders（14th-16th Centuries）, *Social History*, 36-4, 2011, pp. 393-417.

tory, vol. 38-1, 1-31.

De Clercq, W., J.Braekevelt et al.［2015］Aragonese Tiles in a Flemish Castle. A Chivalric Gift-exchange Network in Fifteenth Century Europe, *Al-Masaq-Islam and the Medieval Mediterranean*, 27-7, 2015, 153-171.

Dekeyzer, B.［2006］For Eternal Glory and Remembrance：On the Representation of Patrons in Late Medieval Panel Paintings in the Southern Low Countries, in：P.Trio&M. De Smet,（eds.）, *The Use and Abuse of Sacred Places in Late Medieval Towns*, Leuven, 71-101.

De Rock, J.［2019］*The Image of the City in Early Netherlandish Painting*（*1400-1550*）, Turnhout.

De Smet, D.［1866］Le chevalier Bladelin, surnommé Leesmakere, et la ville de Middelbourg en Flandre, *Bulletin de l'Academie Royale de Belgique*, XXII.

Dixon, L.S.［1987］Portraits and Politics in Two Triptycs by Rogier Van der Weyden, *Gazette des Beaux-Arts*, vol. 129. 186-188.

Dumolyn, J.［1997］*De Brugse opstand van 1436-1438*, Kortrijk-Heule.

Id.［2003］*Sttasvorming en vorstelijke ambtenaren in het graafschap Vlaanderen*（*1419-1477*）, Antwerpen.

Id.［2006］Nobles, Patricians and Officers：The Making of a Regional Political Elite in late Medieval Flanders, *Journal of Social History*, vol. 40, 431-452.

Id.［2008］Pouvoir d'État et enrichissement personnel：investissements et stratégies d'accumulation mis en oeuvre par les officiers des ducs de Bourgogne en Flandre, *Le Moyen Age*, 114-1, 67-94.

Dumolyns, J.&K.Moermans［2007］Distinctie en memorie. Symbolische investeringen in de eeuwigheid door laatmiddeleeuwse hoge ambtenaren in het graafschap Vlaanderen, *Tijdschrift voor Geschiedenis*, 116-3, 335-342.

Haemers, J.［2005］Middelburg na Pieter Bladelin：De juridische en militarische strijd tussen vorst, stad en adel om sociale erkenning en politieke macht（1472-1492）, *Handelingen van het Genootschap voor Geschiedenis*, CXLII, 215-265.

Haemers, J.［2008］*For the Common Good. State Power and Urban Revolts in the Reign of Mary of Burgundy*（*1477-1492*）, Turnhout.

Lameere, E.［1900］*Le Grand Conseil des ducs de Bourgogne de la maison de Valois*, Bruxelles.

Martens, M.P.［1999］Nieuwe biografische gegevens over Pieter Bladelin, de stichter van Middelburg, *Jaarboek van de heemkundige kring Het Ambacht Maldegem*, V, 244-250.

Martens, M.P., Till-Holger Borchert et al.（eds.）［2020］*Van Eyck*, London.

Milis-Proost, G.［1966］"BLADELIN, Pieter", Nationnal Biografisch Woordenboek, vol. 2, Brussel, pp.61-62.

Paravicini, W.［2002］Zur Biographie von Guillaume Hugonet, Kanzler Herzog Karls des Kühnen、in：*Menschen am Hof der Herzôge von Burgund*, Stuttgart. 107-142.

Id.［2002］：L'arsenal intellectuel d'un homme de pouvoir. Les livres de Guillaume Hugonet, Chancelier de Bourgogne, in：*Menschen am Hof*, 143-208.

Paviot, J.［2003］*Les ducs de Bourgogne. La croisade et l'Orient*, Paris.

Prevenier, W.［1972］Officials in Town and Countryside in the Low Countries：Social and Professional Developments from the Fourteenth to the Sixteenth Century, *Acta Hisotriae Neerlandicae*, vol. VII.

Scnerb, B.［1999］*L'Etat bourguignon, 1363-1477*, Paris.

Stabel, P.［1997］Social Reality and Artistic Image：the Urban Experience in the Late Medieval Low Countries. Some Introductory Remarks on the Occasion of a Colloquium, in：M.Carlier et al.（eds.）, *Core and Periphery in Late Medieval Urban Society*, Leuven, 16-25.

Stein, R.［2014］*De hertog en zijn Staten. De eenwordig van de Bourgondische Nederlanden, ca. 1380-1480*, Hilversum.

Verschelde, C.［1879］Testament de Pierre Bladelin. Fondateur de Middelbourg en Flandre, 17 Mars 1472, *Annales de la Société pour l'étude de l'histoire et de antiquité de la Flandre*, t. XXX, 1-32.

Warlop, E.［1975-76］*The Flemish Nobility before 1300*, Kortrijk.

今井澄子［2013］「初期フランドル絵画の「実景」―都市ブリュッヘのアイデンティティの形成とその繁栄をめぐって―」『大阪大谷大学文化財研究』第13号、1-25頁。

河原温［2016］「15世紀後半ブルゴーニュ公国における都市・宮廷・政治文化―シャルル・ル・テメレール期を中心に―」藤井美男編『ブルゴーニュ国家の形成と変容―権力・制度・文化―』九州大学出版会、261-297頁。

河原温［2019］「15世紀ブルゴーニュ公国の世界」『ヨーロッパ前近代の複合国家』（愛知大学人文社会学研究所、研究報告論文集）、7-21頁。

（2020年10月22日受理）